

15. 小屋敷遺跡（第2次調査）

所在地 長坂町大八田字道添

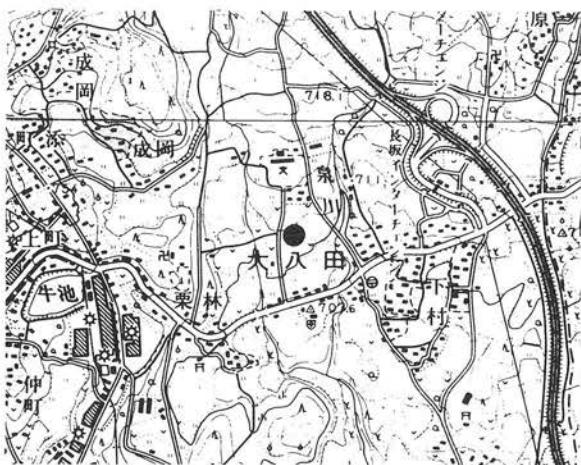
調査原因 宅地造成

調査期間 1999年4月27日～7月2日

調査面積 約900m²

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 村松佳幸・松田拓也



小屋敷遺跡は、長坂町立秋田小学校周辺から中央自動車道にかけての、東に泉川、西に鳩川が流れる低尾根上の緩斜面に位置している。平成3年にA区からD区までの調査が行われており、縄文時代中期、平安時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されている。今回、秋田小学校の約100m南の宅地造成工事に先立ち、E区として第2次調査を実施した。調査区の面積は約900m²、標高は約704mである。

今回の調査で発見された遺構は、縄文時代前期初頭と考えられる竪穴遺構2基、平安時代の竪穴住居跡2軒、時期不明の溝3条、土坑約30基、ピット約60基などである。遺物は縄文時代前期初頭、及び中期・後期の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・陶器、中世から近代にかけての陶磁器などが出土した。

1・2号竪穴遺構からは縄文時代前期初頭の土器片や石器、黒曜石片が多数出土した。土器は木島式などが出土しており、北巨摩地域では大泉村金生遺跡や甲ッ原遺跡、須玉町塩川遺跡など数ヶ所で発見されているにすぎず、県内でも出土例の少ないものである。竪穴遺構は径が約4mの不整な円形をしており、ピットが数基確認された。2基とも住居跡と考えられるが、壁や床面等の遺存状態が良好ではなく、ピットの配置も不規則で、炉も確認できなかった。

平安時代の竪穴住居跡は2軒見つかっているが、このうち1号住居跡は東半分が調査区外であったために全体の構造を確認することはできなかった。2号住居跡は1号溝によって東側の一部を削られている。カマドは東壁に作られていたが、袖石や粘土などの構築物は見られず、わずかに焼土が残っていただけであった。

調査区の中央には3条の溝が通っている。溝の内部に大小の礫や砂が堆積していたことから、かつて水が流れていたと思われるが、その具体的な性格については不明である。1号溝は直線的な大きな溝の東隣に細い溝を伴っており、これが人工的に設けられたものであることをうかがわせる。また、3号溝の中央東側からは多数のピットが発見されており、これらは水場として利用された際の痕跡である可能性も考えられる。これらの溝の明確な時期は不明であるが、1号溝が平安時代の2号住居跡を切っていることや、3号溝から平安時代以降の土師器片や陶器片が多数出土していることなどから、平安時代以降のものと考えられる。

この他、調査区東側全域にわたって多数の土坑・ピットが発見されたが、これらの多くは出土遺物がほとんど見られずその性格も明らかではない。また、調査区の西側は多数の巨石を含む層に覆われており、この層の上部から流れ込みと考えられる遺物が出土したもの、遺構は発見されなかった。

今回の調査では、県内でも出土例の少ない縄文時代前期初頭の遺構・遺物が出土するなど大きな成果が得られた。今後、この時期の八ヶ岳南麓における人々の生活を探る上で重要な手がかりになるものと考えられる。



小屋敷遺跡E区全体図（グリッドは5mメッシュ）



小屋敷遺跡E区出土土器 (S=1/3)